

血液型と性格の関連についての調査的研究

久保 義郎*・三宅由起子**

Correlation between blood types and personalities

Yoshio KUBO*, Yukiko MIYAKE**

Abstract

Correlation between blood types and personalities was investigated in university students (n=298) through two investigations by them administering (1) The Big Five personality test and (2) a questionnaire. The questionnaire consisted of items that described tendencies of each blood type that were quoted from a book about correlation between blood types and personalities. Another researcher conducted (1) above as a different study, in order to avoid response bias. Regarding (2), participants were required to estimate whether each item might agree or disagree with their own personalities. Then, their blood types were recorded. The results of an analysis of covariance indicated the following: (1) there was no significant difference in character tendencies based on the blood type. Regarding (2), items that participants regarded as agreeable with their characters and those they regarded as disagreeable did not have a significant correlation with blood types. The above results suggest that there is no correlation between blood types and personalities.

Key words : blood types, personalities, Big Five, a book about correlation between blood types and personalities

キーワード : 血液型, 性格, Big Five性格検査, 血液型と性格の本

I. 問題と目的

1. 血液型と性格の関連性についての先行研究

血液型と性格の関連性があるとする「血液型性格理論」について、村上・村上¹⁾は以下のように

述べている。血液型性格学の創始者は古川²⁾であり、古川は知人を観察した結果、A型は消極的・保守的、B型は外面的に積極的・進取的、O型は積極的・進取的、AB型はAとBの混合型であると考えた。古川の説は発表当時は注目を集め、陸軍がいくつか

* 吉備国際大学心理学部臨床心理学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

*Department of Clinical Psychology, School of Psychology, KIBI International University
8, Igamachi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

** 株式会社コックス

※ 本研究は、吉備国際大学社会福祉学部臨床心理学科の2009年度卒業論文として三宅由起子氏が執筆した論文に加筆・修正したものである。

追試を行ったが、予想される関係は見つからなかった。古川学説は1971年に能見の「血液型でわかる相性」という本によって大流行した。さらに、長谷川³⁾によれば、その後、いわゆる「血液型人間学」の関連書籍が1983年頃に多く発行され、社会的ブームと呼ばれるほどの流行を見せた。

長谷川³⁾は、YG検査、およびPFスタディ検査を用いて血液型と性格との関連性を検討しているが、関連性を支持するデータは何一つ得られなかったと述べている。その他にも多く血液型と性格に関する論文が発表されているが、両者の関連性は認められておらず（たとえば、長谷川⁴⁾、詫摩・松井⁵⁾、松井⁶⁾など）、上村・サトウ⁷⁾は、「古川²⁾の提唱以降300もの追試が行われた結果、学問的には妥当性がないと判断されるに至った」と述べている。

にもかかわらず、佐藤・渡辺⁸⁾のレビューによると、1990年代当初までにおいて、様々な調査において、約6割の人が血液型と性格の関係を認めていたようである。近年でも2004年以降、「血液型」関連のテレビ番組が急増したり⁹⁾、血液型と性格に関する書籍が多く発行されるなど、再び「血液型と性格」ブームが生じている。

2. 血液型ステレオタイプ

多くの研究によって血液型と性格には関係がないとされながらも、一方では関係があると広く認識されているのはなぜだろうか。その大きな理由の1つとして、「ステレオタイプ」が考えられる。ステレオタイプとは、比較的固定され、過度に簡略化された集団や階級についての一般概念であり、いったん作られてしまうとなかなか変化しない。というのも、私たちは自分の持つステレオタイプと一致する例に注目しがちで、ステレオタイプを裏付けるような証拠ばかりを集めてしまうためである。

さらに、各血液型のステレオタイプとかけ離れている特徴の人に出会ったとしても、血液型ステレオ

タイプへの信頼は簡単には崩れない¹⁰⁾。例えば、「A型は神経質である」というステレオタイプを持った人が、神経質ではないA型の人に出会ったとしても、「あの人だけは例外」だとして切り離し、その結果「A型は神経質である」というステレオタイプを持ち続けるからである。

3. バーナム効果

次に「バーナム効果」が挙げられる。バーナム効果とは、誰にでも該当するような曖昧で一般的な性格をあらわす記述を、「あなたの性格です」と言って渡されると、多くの人が自分だけに当てはまる正確なものだと捉えてしまう現象である。

Snyderら¹¹⁾は、すべての人に同じ内容の性格診断を渡し、その結果をグループ1には心理検査の診断結果、グループ2には占星術の診断結果、グループ3には筆跡学による診断結果として見せた。そしてまた別のグループに「これは一般的に人々に当てはまることです」と告げて記述文を渡した。その後、その診断結果が自分の性格に当てはまっているか否かを尋ねたところ、先の3グループはどのグループの人々も「当てはまる」とした人が多くみられたが、「一般的に人々に当てはまる」性格として告げられた人々は、「自分にはあまり当てはまらない」とする人が多くみられたという。また、Gauquelin¹²⁾は、被験者にその人自身の誕生日に基づく診断結果と、全く無関係な診断結果の2種類を何も説明せずに渡し、どちらの方が自分に当てはまっているかを尋ねるという調査を行った。その結果、選ばれた割合はおおよそ半々であった。これらの研究はいずれも、「これがあなたの性格だ」と特定されると「確かに当たっている」と、簡単に受け入れてしまう傾向があることを示している。

4. 主要5因子性格検査

一方、血液型と性格の関連性が見出されて来な

かった要因として、検証に用いられた性格検査自体の問題も指摘されうる。したがって、この点を明らかにするには、信頼性、妥当性が十分に高い性格検査を用いる必要がある。

この点において、主要5因子性格検査（以下Big Five）は、従来の検査に比べ、信頼性、妥当性ともにかなり高いと結論づけられている^{13) 14)}。Big Fiveは、性格の基本次元は、外向性（E）、協調性（A）、勤勉性（C）、情緒安定性（N）、知性（O）の5因子であるとするBig Five理論（あるいは5因子モデル）に基づいており、これらの因子は頑健で安定しており、普遍的であることが知られている。

5. 本研究の目的

先行研究から判断すると、多くの人が血液型と性格の関連性について信じるに至ったのは、バーナム効果によって、ステレオタイプが形成されたためと推測されるが、本研究では以下の2つの研究を実施することで、血液型と性格の関連性について改めて検討する。

研究1) 信頼性と妥当性の高い性格検査とされるBig Fiveを用いた場合、血液型によって性格傾向に差がみられるのか。

研究2) 血液型と性格の関連性について記述した書籍が「当たっている」とされるのは、バーナム効果等ではなく、読者が本当に血液型別の性格傾向の違いに基づいて判断した結果なのか。

II. 方法

1. 調査対象・調査時期

吉備国際大学に在籍する大学生1～4年生298名（男性167名、女性130名、不明1名）を対象として、質問紙による調査を行った。調査は講義の時間を利用して行った。調査時期は2009年7月中旬から下旬にかけてであった。

2. 測度と実施手続き

1) Big Five

Goldberg¹⁴⁾を基礎に、村上・村上¹⁵⁾によって日本語版が作成された。実施に際しては、回答にバイアスが生じないように、他の研究の調査として別の調査者が実施した。

2) 血液型と性格の関連性について記述した書籍を元に作成した質問紙

血液型と性格の関連を記した書籍である、「血液型別自分の説明書」^{16) 17) 18) 19)}は、2010年11月現在、560万部以上売れているとされる。この書籍に記述されている性格傾向についての文章を、臨床心理学専攻の学部4年生3名、および修士課程の大学院生1名の計4人が抽出した。その際に、①記述内容に

Table 1 血液型別の性格特徴について記述した本から抽出した項目（一部）

-
- 1 計画を立てるのが好き。
 - 2 未来よりも「過去」にこだわる。
 - 3 キレると怖い。怖いことする。
 - 4 喜怒哀楽をコントロールできる。
 - 5 昔の失敗は忘れない。怖くて。
 - 6 セールスの電話がなかなか切れない。
 - 7 努力してる姿は人に見せない。
 - 8 煮詰まってもお何も考えない。
 - 9 ちょこちょこキレるが、本気でキレるのは年に1回あるかないか。
 - 10 酔っても人を頼らず。
 - 11 全然差別しない。
 - 12 気分の上下が激しい。
 - 13 基本的に根は明るい。
 - 14 人にオゴるのが好き。
 - 15 基本は惚れっぽい。
 - 16 他人は他人と割り切れてしまう。
 - 17 いい映画やドラマにのめり込む。
 - 18 実力で勝負したいと思っている。
 - 19 好きなコトに関してはうるさい。
 - 20 何事も先を読みながら進めていく。
-

血液型があるなど、すぐに血液型を特定できる項目、②「でも」、「だから」など前後の文とつながりのある項目、③絵を伴っている項目を除いた。血液型別にそれぞれ18項目ずつ抽出し、計72の質問項目群とした。これらの項目をランダムに配置して質問紙の形に作成し、「1：全くあてはまらない」～「5：とてもあてはまる」までの5件法で評定を求めた。これらの質問項目の一部をTable 1に示した。

さらに、回答にバイアスを与える可能性が考えられる、「血液型と性格の関係について興味がある」、「血液型と性格には関係があると思う」、「(血液型別)自分の説明書という本を知っている」、「(血液型別)自分の説明書をじっくり読んだことがある」の4項目を加え、同様に5件法で回答を求めた。最後に血液型を尋ねた。

Ⅲ. 結果

1. 分析対象

まず、298名の回答の中で質問項目の欠損率が10%を超える者、血液型が不明の者、Big Fiveのたため回答を測るF尺度得点が35～65点の範囲外の者を除いた。次に、「(血液型別)自分の説明書という本を知っている」の評定値が低いにもかかわらず、「(血液型別)自分の説明書という本をじっくり読んだことがある」の評定値が高いといった、矛盾した回答を示している者を除いた。最終的に273名(男性149名、女性123名、不明1名)が以降の分析対象となった。

2. 共変量の設定

分析に先立って、回答にバイアスを生じさせる変量を統制する目的で、共変量を設定することとした。今回の質問項目である、①「血液型と性格の関係について興味がある」、②「血液型と性格には関係があると思う」、③「(血液型別)自分の説明書という

本を知っている」、④「(血液型別)自分の説明書という本をじっくり読んだことがある」の4項目の評定値についてPearsonの積率相関係数を算出したところ、①と②の間が $r=.64$ ($p<.05$)、③と④の間が $r=.42$ ($p<.05$)と比較的高い相関が見られた。その一方で、②と④の間に有意な相関は見られなかったため ($r=.19$, n.s.)、以下の検討では②と④を共変量とすることとした。

3. 研究1：Big Fiveによる検討

個人ごとに主要5因子とAtt尺度、F尺度の素点をそれぞれ算出し、算出された素点を世代別標準得点に変換したものを従属変数とし、前項の②と④を共変量とし、血液型を要因とする共分散分析を行った。その結果、血液型間に有意な得点差は認められなかった (Table 2)。

一方、共変量とした、「血液型と性格には関係があると思う」についてはE尺度 ($p=.002$)とA尺度 ($p=.009$)と有意差が認められ、回答に影響していたことが示された。

Table 2 血液型を要因、Big Fiveの下位尺度得点を従属変数とした共分散分析結果の一覧

Big Five 下位尺度	血液型別の平均得点				F値	p値
	A	B	O	AB		
E (外向性)	49.3	48.2	48.8	48.7	47.2	.70n.s.
A (協調性)	41.9	41.9	41.6	42.3	41.8	.74n.s.
C (勤勉性)	52.4	51.1	52.7	53.6	170.1	.18n.s.
N (情緒安定性)	50.2	50.6	50.0	50.1	33.7	.80n.s.
O (知性)	52.2	52.1	53.0	51.1	99.5	.40n.s.

4. 研究2：「自分の説明書」項目による検討

5件法で回答を得たデータについて、評定の1、2を「当てはまらない」、4、5を「当てはまる」の2値に置き換えた。次に、それぞれの血液型の項目ごとに「当てはまらない」、あるいは「当てはまる」と回答した個数を個人ごとに算出し、従属変数とした。前項と同様に②と④の項目を共変量とし、血液型を要因とする共分散分析を行った結果、血液

型による差は、O型項目に「当てはまる」と回答した数において認められたが、有意に「少な」かった ($p=.03$)。次に、下位検定としてTukey法による多重比較を行った結果、A型とO型の間に有意差が認められ ($p=.03$)、A型よりO型が、自らの血液型を示しているはずの項目について「当てはまる」とする回答が少ないことが示された。以上の結果をTable 3-1, 2に示した。

ところで共変量に注目すると、②「(血液型別)自分の説明書をじっくり読んだことがある」において、A型項目に「当てはまる」と回答した数に有意差が認められ ($p=.02$)、A型項目に「当てはまらない」と回答した数にも有意差が認められたことから ($p=.01$)、「血液型別自分の説明書」を読むことがA型項目の回答に影響していたことが示された。

Table 3-1 自分の血液型に該当する項目に「当てはまる」と回答した項目数の分散分析結果

項目の種類	回答者の血液型と平均項目数				F値	p値
	A	B	O	AB		
A型項目	8.14	7.33	7.91	8.00	97.0	.41 n.s.
B型項目	8.37	8.76	8.11	8.60	53.0	.66 n.s.
O型項目	9.02	9.13	7.75	8.74	311.3	.03*
AB型項目	7.32	7.13	6.97	7.79	60.3	.61 n.s.

Table 3-2 自分の血液型に該当する項目に「当てはまらない」と回答した項目数の分散分析結果

項目の種類	回答者の血液型と平均項目数				F値	p値
	A	B	O	AB		
A型項目	5.73	6.44	5.55	5.68	136.4	.25 n.s.
B型項目	5.23	5.52	4.82	5.43	95.1	.42 n.s.
O型項目	5.07	5.41	5.79	5.20	122.4	.30 n.s.
AB型項目	6.76	6.95	6.43	7.00	70.5	.55 n.s.

IV. 考察

1. 本研究の分析結果のまとめ

本研究の目的は、①血液型によって性格傾向に差がみられるのか、信頼性と妥当性の高い性格検査を用いて検討すること(研究1)と、②血液型と性格

の関連性について記述した書籍が「当たっている」とされるのは、読者が本当に血液型別の性格傾向の違いに基づいて判断した結果なのかについて検討すること(研究2)であった。本研究の結果より、血液型によって性格傾向に差があるとは言えず、書籍の読者も自らの血液型の性格傾向を記述した文章を特定できるとは言えないと結論された。以下、研究1と研究2に分けて、考察を加える。

2. 研究1：信頼性と妥当性の高い性格検査の結果に基づく血液型と性格の関連性

もし、血液型によって性格傾向に差があるならば、血液型間でBig Fiveの5因子の得点に有意な差が見られるはずである。しかし、研究1の結果、E：外向性、A：協調性、C：勤勉性、N：情緒安定性、O：知性のいずれについても、血液型の違いによる得点差はみられなかった。

ところで、佐藤²⁰⁾は、今まで心理学者は、血液型と性格には関連がないことを示すため、主に質問紙形式の性格テストを用いてその結果、血液型と性格の間には関連がないという論理で研究を行ってきたと述べている。このように先行研究で様々な性格検査が用いられている中、Big Fiveを用いた研究は未だなされていない。信頼性、妥当性がともかなり高いとされるBig Fiveを用いた検討で「血液型と性格に関連があるとは言えない」との結論を得たことの意義は大きく、血液型と性格の関連性が検出されないのは、検査側の問題とする反論を困難にすると考えられる。

3. 研究2：血液型と性格の関連性について記述された書籍の文章について、血液型別に性格傾向の違いが見られるか

研究2で用いた質問項目は、「自分の説明書」¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾から抽出したものだが、血液型別の性格傾向が正しく記述されているならば、自分の血液型の

性格傾向を表す項目については「当てはまる」と回答する数が多くなり、他の血液型の項目には、「当てはまらない」と回答する数が多くなるはずである。しかし、本研究の結果からは、そのような傾向は認められず、逆にO型の回答者が、自らの血液型を示しているはずの項目に「当てはまる」とする回答が有意に「少ない」という結果となった。

これらのことから、血液型別の性格傾向を記述したとする書籍「自分の説明書」が実際にその傾向を表しているとは言えないと考えられる。

4. 共変量から見るステレオタイプについて

ところで、研究1の共分散分析で用いられた共変量に注目すると、「血液型と性格には関係があると思う」を共変量にした場合、外向性（E）ではA型＞B型、協調性（A）では、AB型＞O型という結果となった。つまり、外向性、協調性が高いほど「血液型と性格に関係がある」と回答する人が多いと考えられる。また、「（血液型別）自分の説明書をじっくり読んだことがある」の場合は、有意差は見られず、結果には影響していないと考えられた。

一方、研究2で「（血液型別）自分の説明書をじっくり読んだことがある」を共変量にした場合、A型項目に「当てはまらない」と回答した数と、A型項目に「当てはまる」と回答した数において有意差が見られた。つまり、「（血液型別）自分の説明書」を読むことが、回答に影響を与えていることが示された。このことから「（血液型別）自分の説明書」を読むことはステレオタイプを強化している可能性が考えられた。

5. 先行研究における論争

古川²⁾のあとに血液型性格学に肯定的な姿勢を示した者として能見²¹⁾、能見²²⁾、鈴木²³⁾が挙げられる。最近の研究としては、山崎・飯山・江田・佐藤・清水²⁴⁾が、現代は情報が氾濫している一方、人間

関係がますます希薄になっていることから、性、年齢を問わず、血液型というたった4種類で1個の人間の性格や行動パターンを表現できる指標はまたとないものだと考えられるとして、血液型と性格の関連に肯定的な立場から検証している。しかし山崎²⁴⁾は、古川²⁵⁾は血液型と性格の関係から性格検査を作成し検証しているが、対象人数が60名、被験者の大部分が女性など、偏りが大きいという、血液型と性格の間に関係があるとは言えない結果であると述べている。

ところで、大村²⁶⁾は著書の中で、能見や鈴木を批判している。というのも、能見親子の研究に関しては、研究で使用された16万人にも及ぶというデータや、独自の客観的テストに基づいたデータから科学的事実であることを実証しているとしているが、その独自の客観的テストも、それに基づいた数万、数十万に及ぶデータもどこにも発表されていないと大村は述べている。このように、能見らの研究にはあいまいな点が多く、本当に血液型と性格に関連があるとする根拠は示されていないと言える。

菊池・谷口・宮元²⁷⁾による書籍には、血液型性格学を否定的立場から研究している者のレビューが挙げられている¹⁰⁾。その中で坂元²⁸⁾は、女子大学生219人について調査を行い、血液型と性格には関連がないにも関わらず、そこに関連があるとする俗説によって、歪んだ対人認知が行われ、それが他人に対する偏見にまで発展していくことを見出している。これは、本研究でも取りあげたように、様々な肯定的な説によって積み上げられたステレオタイプによって歪んだ認知が生じ、血液型と性格には関連があるという考えが人々に浸透していることを示していると考えられる。

さらに、ステレオタイプについて坂元²⁹⁾の研究が紹介されている。1人の人物をある被験者には「A型の人」として、別の被験者には「B型の人」として紹介し、その上で、その人物の「ある日の行

動」を記述したA型的な行動とB型的な行動が入り混じった文章を聞かせ、あとで被験者に「行動」を思い出させたところ、A型と紹介された被験者はA型的な行動、B型と紹介された被験者はB型的な行動をより多く思い出したのである。このように、対人印象に関する記憶にも血液型ステレオタイプが影響していることがわかる。

また、ステレオタイプに加えバーナム効果の研究として大村の研究³⁰⁾が紹介されている。それぞれの血液型の性格特徴とされる短文を各20個ずつ抜き出し枠で囲み、実際とは違う血液型のラベルを貼り付け、その上で自分に最も適合していると思うものを一つ選ばせたところ、自分の血液型と一致する偽ラベルの方につられた選択をしているのである。これは、ある程度個々の中に血液型に対するステレオタイプが作り上げられており、「これは～型の性格だ」と提示されると「自分の血液型に合っている」と受け入れてしまう、バーナム効果によると考えられる。ステレオタイプとバーナム効果の影響については、本研究の結果からも示されているところである。

6. 総合考察

本研究の結果より、血液型と性格には関係があると一般的に思われていたり、血液型別「自分の説明書」が多く読まれ、当たっていると評価されるのは、冒頭で述べたようなステレオタイプとバーナム効果のためであると考えられる。

「自分の説明書」の内容にも、そのような表現は

見受けられる。例えば、「趣味が多い」という項目はB型の説明書に書かれているが、このような性格はB型の人だけでなく、他の血液型の人々でも持っている可能性がある。また、AB型の項目で「素直そうで結構頑固」、O型の項目で「スゴイ頑固」、A型の項目で「でも頑固」というように、同じような性格傾向と受け取れるような記述も書かれている。つまり、どの血液型の人でも持っている可能性のある、誰にでも当てはまるような性格傾向を特定の血液型の性格特徴として表すことが、「自分に当てはまっている」と受け入れられてしまうと考えられる。他の書籍やテレビ番組についても同様なことが言えるだろう。

能見³¹⁾の著書「血液型でわかる相性」では、血液型によって生き方や社会性までもが4つに分けられるとされているが、それらの特徴は血液型に関わらず、個人が様々に持ち合わせていることは、今回の研究結果からも示される通りであり、血液型で性格を予測することは不可能と判断される。しかしながら、佐藤²⁰⁾は会社の人事配置や保育園での保育にも血液型が利用されている例もあると述べている。

血液型による判断が、個人の個性や能力より優先されることは、あってはならないことである。ステレオタイプやバーナム効果を考えると、今後も血液型と性格に関連があるという認識は、なかなか無くならないかもしれない。しかし、せめて血液型による偏見や差別を生じさせないように努めることが重要であろう。

引用文献

- 1) 村上宣寛, 村上千恵子 (2001) 血液型性格学, 主要5因子性格検査ハンドブック, 改訂版, 学芸図書, 東京: 7
- 2) 古川竹二 (1927) 血液型による気質の研究, 心理学研究, 2: 612-634
- 3) 長谷川芳典 (1988) 血液型と性格-公開講座受講生が収集したデータに基づく俗説の再検討- 長崎大学医療技術短期大学部紀要 1: 77-89

- 4) 長谷川芳典 (1985) 「血液型と性格」についての非科学的俗説を否定する, 日本教育心理学会第27回総会
- 5) 詫摩武俊, 松井 豊 (1985) 血液型ステレオタイプ, 東京都立大学人文学報, 172: 15-30
- 6) 松井 豊 (1991) 血液型による性格の相違に関する統計的検討, 立川短期大学紀要, 24: 51-54
- 7) 上村晃弘, サトウタツヤ (2006) 疑似性格理論としての血液型性格関連説の多様性, パーソナリティ研究, 15 (1): 33-47
- 8) 佐藤達哉, 渡辺芳之 (1992) 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究, 心理学評論, 35 (2): 234-268
- 9) 長谷川芳典 (2005) 批判的思考のための「血液型性格判断」, 岡山大学文学部紀要, 43: 1-22
- 10) 宮元博章, 田村美恵 (2001) 血液型性格判断を斬る, 菊池聡, 谷口高士, 宮元博章 編, 不思議現象なぜ信じるのか, ころの科学入門, 北大路書房, 138-143
- 11) Snyder, C. R., Larsen, D. L. & Bloom, L. J. (1976) Acceptance of personality interpretations prior to and after receipt of diagnostic feedback supposedly based of psychological, graphological, and astrological assessment procedures. *Journal of Clinical Psychology*, 32: 258-265
- 12) Gauquelin, M. (1979) *Dreams and illusions of astrology*. Prometheus.
- 13) 村上宣寛, 村上千恵子 (1997) 主要5因子性格検査の尺度構成, 性格心理学研究, 6 (1): 29-39
- 14) Goldberg, L. (1992) The Development of Markers for the Big-Five Factors Structure, *Psychological Assessment*, 4 (1): 26-42
- 15) 村上宣寛, 村上千恵子 (1999) 主要5因子性格検査の世代別標準化, 性格心理学研究, 8 (1): 32-42
- 16) Jamais Jamais (2008) B型自分の説明書, 文芸社
- 17) Jamais Jamais (2008) A型自分の説明書, 文芸社
- 18) Jamais Jamais (2008) AB型自分の説明書, 文芸社
- 19) Jamais Jamais (2008) O型自分の説明書, 文芸社
- 20) 佐藤達哉 (1993) 血液型性格関連説についての検討, 社会心理学研究, 8 (3): 197-208
- 21) 能見正比古 (1983) 新, 血液型人間学, 角川文庫
- 22) 能見俊賢 (1990) “血液型” おしゃべり倶楽部, 文化創作出版
- 23) 鈴木芳正 (1974) 血液型性格学, 産心社
- 24) 山崎信也, 飯山智恵, 江田敏正, 佐藤愛美, 清水敦彦 (2004) 血液型と性格の関係, 足利短期大学研究紀要, 24 (1): 41-44
- 25) 古川竹二 (1932) 血液型と気質, 三省堂
- 26) 大村政男 (1990) 血液型と性格, 福村出版
- 27) 菊池聡, 谷口高士, 宮元博章 (1995) 不思議現象なぜ信じるのか, ころの科学入門, 北大路書房
- 28) 坂元 章 (1988) 対人認知様式の個人差とABO式血液型性格判断に関する信念—いわゆる“血液型性格判断”を否定する, 日本社会心理学会第29回大会論文集
- 29) 坂元 章 (1989) 「血液型ステレオタイプに関する知識」と記銘の歪み, 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 29-30
- 30) 高田明和 (1992) 血液型で性格は決まらない—非科学的な性格判断が日本人を振りまわす, *Newton*, 12 (5): 104-111
- 31) 能見正比古 (1971) 血液型でわかる相性, 青春出版社

謝辞: 本研究の調査にご回答下さった吉備国際大学の学生の皆様に感謝いたします。